

✦ 信じるとは

これまで、「十字架」「復活」「贖罪」「聖霊」そして「聖母マリア」についてお話ししてきました。キリスト教になじみのないみなさまにとっては、信じがたい内容が多々あったと思います。クリスチャンと呼ばれる人たちはそれらの教義を学び、受け入れた人たちです。人それぞれに悩み、あるいは戸惑う時期があったはずですが、でも「イエスとともに歩もう」というひとつの〈決断〉をしたわけですね。きょうは第39回で取りあげた「信じるとは」ということをもう少し掘り下げたいと思います。

「信仰」の三つの面

第39回では、上智大学の川村信三先生の『信じるとは、不確かな事柄への一つの賭けなのである』という言葉や、「神の存在の有無」を〈賭け〉という観点から深く追求した人としてパスカルの言葉を引用しながら、『神の在る無しも賭けならば、信仰もまた、ある意味で賭けである。要は決断であり、(中略)生き方の徹底である』という清泉女子大学の米田彰男先生の記事をご紹介します。川村先生はキリスト教の信仰を全人格的行為・自己投入と考えた場合、次のような三つの面があるといっています。

①誠実なある方に全人格を投じて帰依する^{きゐ}という信頼。

「帰依する」…あまりふだん使わない言葉です。「神や仏など、すぐれた者に服従し、すぐること」と辞書にあります。「あの人なら(あの人だから)ついていこう」、「あの方に従っていけば、まちがいない」という場合の信頼です。具体的にみていきましょう。

✦ 井上ひさし氏の「あの人」

私の人生に大きな影響を与えてくれた作家は、遠藤周作氏、司馬遼太郎氏、そして井上ひさし氏です。その中の一人、井上ひさし氏について書いてみます。(「井上氏」とか「井上先生」という書き方は、なんとなくわたしの中の氏のイメージと違うので、失礼ながら「ひさしさん」という呼び方で書きます。)

ひさしさんがキリスト教と出会ったのは15歳・中学3年の秋(1949年)。それまで山形県仙台市東北部郊外の東置賜郡小松町(現・川西町)に住んでいました。お母さん(すでに夫を亡くしていました)がいろいろな仕事をしていたのですが、何をしてもうまくいかず、一関市のラーメン店の住み込み店員になったころ、お兄さんと一緒にカトリックの修道会である「ラ・サール会」が経営する仙台市の『光ヶ丘天使園』という児童養護施設へ収容されました。(ラ・サールと聞くと東大への進学率が高い「ラ・サール高校」という学校を思いうかべるかたも多いと思います。その母体の修道会です。)

カトリックの施設ですから、毎朝ミサに与かり、500項目以上の公教要理^{カテキズム}(カトリックの教義が書かれたもの)を暗唱し、ロザリオを一環ずつ唱える — という生活でした。これだけを読むと、「井上さん、マジメだったんだなァ…」とお考えになる方も多いと思いますが、ところがドッコイ!このころのハチャメチャさを知るには『モッキンポット氏の後始末』(講談社文庫)、『青葉繁れる』(文春文庫)などをお読みください。抱腹絶倒のお話です。それはさておき、ひさしさんは洗礼を受ける決心をしました。「洗礼」を受けたのは、次のような日常があったからです。

『わたしが信じたのは、遙かな東方の異郷へやって来て、孤児たちの夕餉をすこしでも豊かにしよう^{はる}と、荒地を耕し人糞^{じんぶん}を撒き、手を汚し爪の先に土と糞をこびりつかせ、野菜を作る外国の師父^{しふ}たちであり、母国の修道会本部から修道服を新調するようにと送られてくる羅紗^{ラシヤ}の布地を、孤児たちのための学生服に流用し、依然として自分たちは、手垢^{てあか}と脂汗と摩擦でてかてかに光り、継ぎの

当たった修道服で通した修道士たちだった。

べつの言い方をすれば、わたしは天主の存在を信ずる師父(修道会の神父様)たちを信じたのであり、キリストを信ずる襤衣(ボロの衣服)の修道士たちを信じ、キリストの新米兵士になったのだった。』(『道元の冒険』の「あとがき」より。()内は筆者)。

ひさしさんが信じたのは、子どもたちのために汗水たらして働き、自分たちの着衣には目もくれず、学校へ行ってもほかの生徒たちからバカにされないために制服を用意してくれる修道会の神父であり修道士たちだったのです。他者に尽くし・仕える生き方に感銘を受けたからでした。(洗礼名は『マリア・ヨゼフ』。)

ひさしさんを信仰に導いたのは「ひと」でした。キリスト教の信者さんたちは、このような出会いがきっかけで洗礼を受けた方が多いのではないのでしょうか。その相手は、友だち・恋人・先生・神父(修道士)・親・医師…。あるいは実際には会ったことがなくても、本の中での出会った人(著者、登場人物)もあるでしょう。「ひと」との出会いはさまざまなドラマを生みます。そして「新しい人生」を展開させます。

ひさしさんは3年後、上智大学(文学部ドイツ文学科)に進学します。しかし大都會の聖職者たちは天使園にいた師父たちとは違い、『高級な学問でポケットをふくらませ、とっかえひっかえそれらを掴み出し、魔術師よろしく、あの説とこの説をつなぎ合わせたり、甲論と乙論をかけ合わせたりして、天主の存在を証明する公理を立ちどころにひねり出してくれたが、その手は気味の悪いほど白く清潔で、それがわたしをすこしずつ白けさせ、そのうちにわたしはキリスト教団の脱走兵になってしまっていた』(同書)…。自身を『キリスト教団の脱走兵』と自覚したひさしさん。「もうすこし、ほんのちょっと、上智大の聖職者・先生方をよく見ていてくれたらなァ」と思わずにはいられません。

『宗教とは人のことであり、どこかによき人がすくなくともひとりいるなら、今、人間の見ている長い悪夢もやがて醒めることがあるかもしれないと、わたしはまだ宗教とどこかで辛うじてつながっているようだ』(同書)ともお書きになっています。ひさしさんがキリスト教に関する小説や戯曲、評論を書いていたならば、それはそれは「やさしく、ふかく、ゆかいに、まじめに」書かれた「ひさしワールド・イエスの世界」が誕生していたにちがひありません。

(唯一(?)『珍約聖書』という演劇が1973年に公演されています。「ストリッパー犬」(!)の物語で、それはキリスト受難劇の変奏と言われています。)

✦ わたしの「あの人」

わたしにとっての「あの人」は、大学時代の恩師である杉山好^{よしむ}先生になります。「ドイツの民俗」の授業におけるゲーテの『ファウスト』、ゼミでのマクス・ヴェーバー『宗教社会学』等の講義で、キリスト教について深く学ばせていただきました。また、その講義は内村鑑三の無教会主義の信仰、キルケゴールやヒルティの著作、さらにアンチ・キリストのニーチェなどに及び、その内容の深さ・濃さ・広さによって、わたしはキリスト教の世界に引きこまれていきました。

それだけなら「いい先生に出会った」で終わったかもしれませんが、講義やゼミの合宿、授業後の雑談からにじみ出るあたたかいお人柄に魅せられました。いつも微笑みをもって私たちに接してくださり、デキの悪いわたしのような学生の質問にもていねいに答えてくださり、アドバイスもいただきました。〈信仰の門〉をノックしていたわたしに、その重い門を開けてくださったのが杉山先生でした。

『門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、門をたたく者には開かれる』(『ルカ』11.9~10)ことを実感しました。「イエスは私たちと共におられる」と私たちキリスト者は信じていますが、先生こそまさに「イエスと共に歩んでおられる方」でした。

②身のまわりに見出される「しるし」を手がかりに、見えない現実近づいていこうとする理性の歩み。

ある人が語った言葉や書き記した文章、あるいは、その行動の〈裏側〉に潜んでいる大切なもの、すなわち「しるし」を見つけて、その「見えないもの」に賭けようとする理性の歩みが信仰のもう一つの面であると川村先生はおっしゃいます。

第53回でわたしの人生に示された「標識」とその〈裏側〉について書きました。私たちの人生における出来事を別の角度・視点からながめると、自分の思いどおりに進まなかったときでも、そこにはかならず何か意味があり、「目には見えない存在」— それを「神」と呼ぶか、「仏」と呼ぶか、あるいは「サムシング・グレート (何か大なる者)」とするかは別として— が導いてくれたことに気づき、その存在に生かされていこうとすることが「信仰」をいただいた者の生き方と言えるでしょう。どんなに平凡に見える毎日でも、決して「同じことの繰り返し」ではありません。その中で神さまは私たちに「しるし」をお与えになっています。こころの眼を見開き耳を澄ませば、日常生活のいたるところにそれは見つかるはずです。

③信仰の究極の局面のもっとも大切な醍醐味は、「跳躍」ということに集約される。

「跳躍」＝「とびあがること」。私たちは「まだ知られていないこと」を理解しようとするときまずは実際に「見たり・聞いたり・試したり」して得た知識や技能を論理的に積み上げていって「そのもの全体」を把握しようとしています。

『しかし、「信仰」の対象はそうはいかない』と川村先生はおっしゃいます。どんなに論理の階段を昇っていても、あるところで行く手をさえぎる濃い霧が出てきます。その向こうには階段が続いているかもしれないし、断崖絶壁になっているかもしれません。ここでストップするか、あるいは霧に向かって一步踏み出すかの決断を迫られます。踏み出すと決めることは、命がけの「跳躍」をすることを意味します。川村先生は、『この一步を踏み出せる人の心にあるものが、私たちのいう「信仰」に限りなく近いのではないか』と指摘されます。

† 八木重吉の信仰

多くの人たちは「跳躍」することを躊躇します。何がじゃまをしているのでしょうか？ 詩人・八木重吉(1898-1927)は内村鑑三の著書に感化され、プロテスタントの教会で洗礼を受けました。彼に次のような詩があります。

.....
この聖書のことばを / うちがわからみいりたいものだ / ひとつひとつのことばを / わたしのからだの手や足や / 鼻や耳やそして眼のようにかんじたいものだ / ことばのうちがわへはいりこみたい (『聖書』)
.....

「聖書」という漢字に「よいほん」と、ルビがつけてあります。また、聖書の言葉を「内側から〈みいりたい〉」とあります。「みいりたい」とは『「魅入る」の意味である』と関 茂氏(日本基督教団牧師)は考えます。八木重吉の信仰は、神を「信念」や「人生観」、あるいは「主義」としてではなく、『いま生きているところのいのちある人格として感じていた』といわれます。そして「信ずる」という「いのちがけの行為」にいろいろな「理由づけ」や「理屈の裏打ち」は必要ないと考えていました。

.....
理屈は / いちばん低い真理だ / 理屈がなくてもいい位もえよう (『理屈』)
.....

「理屈」＝「ものごとの道理、筋道の通った考え」が成立しなければ認めない、論理的に証明できなければ納得しない…。これこそ「いちばん低い真理」だと八木重吉氏は断言しています。

アブラハムの「跳躍」

『創世記』22章にもものすごい「跳躍」をした人の話があります。アブラハムは中央アジア高原地帯のウルという地に住んでいた民族をまとめていた有力な人(族長)でした。あるとき神は、彼が自分にふさわしいものかどうか試されました。アブラハムは子どもに恵まれていなかったのですが、75歳になってやっと神が約束を果たしてくれ、一人息子イサクを授かりました。しかし神はある日突然、イサクを「焼き尽くす生け贄として捧げよ」とアブラハムに告げます。アブラハムは「なぜ神はそんなことを…」と苦しみ悩みぬいたことでしょう。(神が人間に「そんなむごいことをなぜ…」と思わせるような物語は、ほかにも『ヨブ記』があります。これについては後日、お話しすることもあらずです。)

アブラハムは息子をモリヤという地に連れて行き、そこに祭壇をつくって薪を並べ、イサクを縛ってその上に載せました。そして刃物で息子を屠ろうとした時、主の御使いが現れて『その子に手を下すな。あなたが神を畏れる者であることが、今、わかったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった』と伝え、イサクは無事アブラハムの手に戻った…という話があります。「なぜ神さまは、そんなことをするの?」と思わずにはいられません。

「信頼している神が意味のないことをなさるはずはない」というアブラハムの確信が、彼を息子を神にささげるといふ考えられない行為をさせたと、川村先生は書いておられます。そして、『「信じる」ということは、全身全霊をかけた命賭けの行為であり、「跳ぶ」ことを要求する。(中略)これは決して人間業ではない。頭で考えて、理解した結果得られることではない。それは、大きな無駄かもしれない。しかし、その無駄に希望を託すことができる、と思える瞬間が人には確かに訪れる。神というものに向かって「跳躍」できること、それが信仰の要である』と結んでおられます。

信仰は神から与えられる「恵み」

跳躍が『人間業ではない』のに、なぜできた人たちがいるのでしょうか？ それは、信仰は神さまからの〈恵み〉だからです。『あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ』(『ヨハネ』15-16)とあるように、〈主導権〉は、神さまにあります。

コインの「裏か、表か」、どちらのチームが「勝つか、負けるか」、このパチンコ台で、玉は「出るか、出ないか」…人間はいろいろなものに賭けます。

もし、ある宗教を「信じるか、信じないか」も「賭け」だとすれば、賭ける前にその人が「一度きりの人生をどう生きたいのか」という根本的な問いについて考えなければなりません。その答えを神さまは、今か今かと待っておられるはずで、あなたの背中を「ポンッ」と押してくださるのは、神さまです — ある日、突然…。

【引用・参考にした書籍】 ・日本聖書協会 『新共同訳 The BIBLE』

- ・川村信三 『二十一世紀キリスト教読本 福音は日本の土壌で実を結ぶ』
- ・井上ひさし 『道元の冒険』(新潮文庫、1985)、 『モッキンポット氏の後始末』(講談社文庫 2011)
- ・笹沢 信 『ひさし伝』(新潮社、2012) ・関 茂 『八木重吉 詩と生涯と信仰』(新教新書、2001)
- ・米田彰男 『寅さんとイエス』 ・大野 晋、田中章夫 編 『角川 必携 国語辞典』